

## 社会福祉領域における音楽アウトリーチの効果に関する探索的研究

湯原悦子  
石川貴憲

### 要旨

本研究の目的は、筆者らが社会福祉領域で行った音楽アウトリーチの効果について探索的に明らかにすることである。コロナ禍の最中である2021年度、愛知県内の8つの社会福祉法人において、プロのアーティストが直接社会福祉施設に出向き、演奏を行う活動を計10回行った。企画に携わった職員とアーティストへのインタビューの結果、施設利用者には演奏を楽しむ感情を素直に表現できた、新しいことに挑戦できた、利用者家族には心休まる時間となった、職員や参加者と交流ができた、職員には自らの疲労を自覚し癒された、新しいケア方法へのヒントを得た、アーティストには視野が広がりスキルが身に付いた、自分自身の存在意義を感じたなどの効果が確認できた。社会福祉現場における音楽アウトリーチに関する実践の蓄積が十分に行われていない現在、本研究で見出された効果は今後、この領域で研究を行ううえでの基礎的な知見となることが期待できる。

キーワード：音楽アウトリーチ，社会福祉，コロナ禍

### I. はじめに

2020年春以降、コロナウイルスの感染拡大に伴い、社会福祉施設ではボランティアの受け入れを全面的に中止する事態となった。支援の現場では、感染者のクラスターが生じないよう防止策がとられ、それまで地域の方々の協力を得て行っていたレクリエーションについても自粛する動きが広がっていった。この状況は2022年に入っても収束せず、地域住民との交流に関しては、いまだ再開の目処が立たない状況にある。そんななか、社会福祉施設の利用者や家族、職員は常に緊張を強いられ、不安やストレスが蓄積しがちな状況にある。この状況を克服できる力を得るためにも、彼らの日常生活の充実や生活の質の向上は喫緊の課題と言えよう。

筆者らはコロナ禍以前から社会福祉領域において、プロのアーティストによる音楽アウトリー

チを行ってきた。ここで言う音楽アウトリーチとは、プロのアーティストが直接、社会福祉施設や事業所に出向き、聴き手のリクエストに応えながら演奏活動を行うというものである。音楽は比較的多くの人々に好まれる活動であり、演奏形態を工夫すれば、受け入れ先にさほど負荷をかけることなく実施することが可能である。また、演奏者と聴き手との距離を十分に取ることが容易で、感染防止策を講じやすいという利点がある。筆者らは、コロナ禍のなか奮闘する社会福祉施設や事業所の職員の姿を目の当たりし、何とか現場に資する活動を行うことはできないかと考え、地元でプロとして活動するアーティストらによる音楽アウトリーチを企画することにした。筆者らの伝手を頼りに活動可能な社会福祉法人を探したところ、8つの法人の応諾があり、これら法人において、2021年4月から5月にかけて、計10回の活動を行うことができた。

本研究の目的は、この音楽アウトリーチの効果検証、すなわち行った活動が誰に対し、どのような効果があったのかを探索的に明らかにすることである。本稿では、はじめに先行研究をレビューし、音楽アウトリーチや医療・社会福祉現場における音楽活動に関する調査や研究を調べ、これまで示された効果や課題等について確認する。その後、関わった者たちへのインタビューを通じて、筆者らが今回、社会福祉領域で行った活動の効果について明らかにしていく。

## II. 先行研究の到達点

### 1. 音楽アウトリーチに関する研究

音楽アウトリーチの研究を行う林（2013: 6）によると、アウトリーチという言葉は元来、社会福祉の分野における一種の啓発活動、教育普及活動という意味で用いられてきた。音楽アウトリーチは音楽家や音楽団体・機関が、音楽に触れる機会が少ない人々に働きかけ、音楽を普及することに加え、音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的なスタンスにその特徴がある<sup>(注1)</sup>。

音楽アウトリーチの実際の場面では、演奏者と聴衆のコミュニケーションに重点が置かれており、そのために場所や対象、形態、方法などが工夫されている。2001年に制定された文化芸術振興基本法（2017年に文化芸術基本法に改定）や2012年に制定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」に見られるように、音楽アウトリーチは国の政策としても重要視されるようになった（梶田・中村 2021: 136）。

音楽アウトリーチに関する研究では、文化庁が推進する「文化芸術による子供育成総合事業」の影響が大きく、教育現場における効果について言及するものが数多く確認できる。教育の現場では、オーケストラが全国の小・中学校に出向いて体育館等で演奏会を行う、児童・生徒とのコミュニケーションを図りながら音楽に親しみを持ってもらうようなワークショップを行うなどさまざまな音楽アウトリーチが行われており、それらの効果について言及する研究が蓄積されつつある（林 2003, 2013, 原・山中・木村 2016, 永島 2021, 上村・小野 2022 など）。

教育現場における音楽アウトリーチの効果について、上村・小野らは、音楽に触れることが子

どもの内面に様々な気づきと変容をもたらすと認めつつも、実践に関する研究知見が乏しく、経験則にもとづく評価が主流となっていると指摘する。音楽アウトリーチは、その教育的意義が不明確なまま乱発され、現場に混乱が生じており、その効果（教育的意義）、およびそれが生起するためのメカニズムを解明することが喫緊の課題である（上村・小野 2022: 15）。加えて原らは音楽アウトリーチ活動について、演奏会を催すというイベント的なものが中心で、継続的なものでなかったりするケースも少なくないとの懸念を示す。その原因として、文化・芸術をより多くの住民や子どもたちに提供するという視点から、文化施設や芸術団体、大学側から地域や学校にアプローチする側面が強調された結果、実際に教育や地域の現場で効果があるのか、またどのような効果が生まれているのかについて十分に検討されてこなかったことがあるのではないかと考察する（原・山中・木村 2016: 2）。

研究内容について言えば、新原・大沢ら（2015: 2-3）はこれまでの音楽アウトリーチ研究について、実践や授業の報告が主に音楽家もしくは研究者の観点からのものが中心となっており、教師や保育者といった教育現場からの主体的な語りが扱われてこなかったこと、相互作用による学習のプロセスを焦点化してこなかったことを課題に挙げる。音楽家の演奏を聴くだけのプログラムだけでなく、音楽家と参加者という異なるコミュニティの交流による相互作用や、それによる音楽家の側の学習なども考慮に入れたプログラムが増加していることが近年の音楽アウトリーチの特徴であり、プログラムの企画に際しては双方向的なコミュニケーションによる学習プロセスの生起・促進が意図されながらも、それを研究としてまとめる際には達成的・獲得的な学習観によつての記述しかなくおらず、実際のコミュニケーションを経て参加者がどのような意味づけを行ったのかというプロセスに言及する研究は少ないと述べている。

その他、公立文化施設によって行われる音楽芸術分野のアウトリーチについて研究する梶田（2021）は、今後の課題としてアーティストと文化施設職員の関係性を強化していく必要があること、アーティストのキャリア教育が不十分であり、アウトリーチに地域との繋がりを求める公立文化施設との間に齟齬があることを指摘している。この点について、原らも「音楽アウトリーチ活動において提供側と享受側のよりよい互恵関係を継続・発展させるために、提供側としては、享受側の多様なニーズに応じたプログラム開発、双方のつなぎ役としてのコーディネータの人材育成、財政的支援などの課題について、更に検討を重ねることが必要」と述べている（原・山中・木村 2016: 2）。

## 2. 医療・社会福祉現場における音楽活動

次に医療・社会福祉現場における音楽活動について、ここでも教育現場と同様に、音楽は昔から様々な形で取り入れられてきた。たとえば精神障害を持つ人に対する音楽活動は精神保健医療福祉の施策動向と社会情勢に呼応し、レクリエーションやリハビリテーション、治療や生活支援の目的で用いられ、徐々にその効果が確認されるようになると一部分は「療法」として分化し、また意図的に用いられ、「精神病院」から地域へ広がっていった。1950年以降様々な展開された

音楽活動は、療法を目的とする音楽療法として理論化・体系化されてきた以外に、理論化されていないものも含め、専門職により当該時期の治療法や施策、支援体制のなかに柔軟に取り込まれ、「時間と空間の共有」と「楽しむ」という特徴を活かし、治療と生活支援の双方において継続して活用されてきたのである（山田 2020: 41）。

このように、医療・社会福祉現場においては、音楽は「療法」という目的で実施されるもの<sup>(注2)</sup>と、「楽しむ」ことを目的として行われる音楽活動と2つの方向性がある。そして研究においては、主に「療法」を意識して実施されるものに関して効果検証が試みられてきた（関根・八重田・佐島 2021, 森川 2019 など）。

海外においては、Morales ら（2020）がシステマティックレビューを行い、8つの研究のメタアナリシスの結果、音楽は認知症の人の認知能力や生活の質の向上、長期のうつに効果があることを明らかにした。主に音楽を聴取することによる受動的音楽療法についても、心理的・精神的状態やBPSDに対し、効果が確認されている（森川 2019）。

認知症者に対する音楽療法の効果について述べた辻ら（2021: 209）は、「先行研究で様々な客観的指標が用いられているが、音楽療法による介入で身体的、心理的側面への効果や行動の変化があったことは明らかである」と整理している。また、「歌唱や楽器演奏、リズム活動などから構成された集団セッションにより、D-EMS（認知症用愛媛式音楽療法評価表の「集中力」「表情」「認知」「社会性」で有意な改善が見られた。歌唱や楽器演奏などから構成された小集団セッションにより、TORS（東大式観察評価スケール）及びAR-MCL（アルボース式音楽療法チェックリスト）の総得点で有意な改善がみられたことを示し、その効果を客観的に確認している。

一方、辻ら（2021）は認知症高齢者に対し、これまで日本で行われてきた音楽療法の実験研究について文献的検討を行い、介入方法や客観的指標などを検討した結果、「認知症の非薬物療法に関するエビデンスレベルは総体してCであり弱い根拠」と述べている。また、楽器演奏・音楽療法の認知症予防効果について、赤澤ら（2019）が先行研究レビューを行った結果においても、音楽療法については、認知症予防の介入として医学的にはエビデンスがなく、認知症の臨床的実施のガイドラインでは grade C1 のランク、つまり「科学的なエビデンスはないが、推奨されるもの」という位置づけとされた。認知症患者に対する音楽療法は、2016年までに3編のコクランレビューがあるが「被験者数が少なく、研究の方法論的な品質が低いため、メタ分析を実施できなく、有益な結論を導出できなかった」、しかし2018年に発表されたコクランレビューでは詳細な検討がなされ、依然として従来と同様の厳しい結論であるが、一部効果を認めるような内容に変化しているように見受けられる、と述べている。

その他、山口ら（2019）が重症心身障害児に対し、行われた音楽や感覚統合などによる刺激による介入や集団での交流に関する効果についてシステマティックレビューを行ったところ、有効性の判断が難しいという結果になった。ただし「現状では判断はむずかしいが症例検討での有効性は示されており、今後の研究の蓄積により有効性が示される可能性がある（山口・鈴木 2019: 323）」と述べられており、今後の継続的な研究が期待されている。

### 3. 先行研究の到達点と今後の研究課題

教育現場においては、音楽アウトリーチは従来、割合が多かった〔鑑賞系〕の「鑑賞型」プログラムから、提供側と享受側が交流する中で享受側が積極的に関わる「参加型」、また〔創造系〕として分類されている提供側が享受側に創造的なワークショップ活動や体験活動を仕組んだりする「参加型（単発・集中）」や、協働して音楽や演奏をつくっていきこうとする「協働型（継続・長期）」、さらにゲスト・ティーチャーとして演奏技能の向上を支援する〔技術指導系〕の「合唱型」、「器楽型」、「伝統音楽型」など、享受側の多様なニーズに伴い、その活動の広がりを見せている（斉藤 2013）。

ただし、それら活動の効果については、研究による知見が乏しく、経験則にもとづく評価が主流となっている。効果（教育的意義）およびそれが生起するためのメカニズムの解明が課題である。企画に際しては、双方向のコミュニケーションを経て参加者がどのような意味づけを行ったのかというプロセスの研究、享受側の多様なニーズに応じたプログラム開発、双方のつなぎ役としてのコーディネータの人材育成、財政的支援などの課題について、更に検討を重ねることが求められている。

医療・社会福祉現場における音楽活動については、音楽療法として理論化・体系化されてきた以外に、理論化されていないものも含め、様々な形態で行われている。音楽療法について、非薬物療法に関するエビデンスレベルとしては弱く、医学的には推奨されるものにとどまるが、事例レベル、実践レベルでは有効性が示されており、今後の研究の蓄積が望まれる。その一方で、療法として行われていないもの、特に社会福祉領域における音楽活動の場合、研究そのものがまだ十分になされていない。この類いの音楽活動は必ずしも研究を意識したデザインで実施されるわけではないため、効果検証として事前・事後の尺度を用いた科学的なエビデンスを示すことは難しい状況にある。しかし実践として、また事例レベルでは参加者に効果や有用性が実感されており、そこで生じている効果を研究という形で確認し、客観化していく試みは必要であろう。研究と実践の乖離を埋めるためにも、現場において探索的な研究を行い、実践を妨げないことを前提としつつも、いかなる効果検証が可能なのかについて検討を深めていくことが求められている。

### Ⅲ. 探索的調査 —社会福祉施設における音楽アウトリーチの効果—

ここからは筆者らが行った音楽アウトリーチの概要と、それらの効果について確認した調査結果について示す。本調査で明らかにするのは、筆者らの呼びかけに応じた愛知県内の8つの社会福祉法人（障害児支援1、障害者支援6、高齢者支援1）において利用者や家族、職員の参加のもと実施した音楽アウトリーチの効果である。この活動は2021年8月から2022年1月までの間に、計10回実施した。

## 1. 研究方法

### 1) 調査対象

音楽アウトリーチを行った法人の職員2名、活動に賛同し実際の演奏を担当したアーティスト5名である。職員については、10回行った活動のうち3回と最も多く実施することができたA社会福祉法人の担当者に調査協力を依頼した。A社会福祉法人は愛知県内に本部があり、「誕生から看取りまで生涯寄り添える存在でありたい」をミッションに掲げ、障害児・者のライフステージに合わせた支援を行っている。今回、ヒアリング対象の職員2名は、1名が法人幹部、1名が音楽活動を実施した施設に勤務する者であり、両名ともに企画の立案と運営全般を担った。アーティストについては5名全員がフリーランス、1名がパーカッション奏者、あとの4名はサクソフォン奏者であり、通常は様々な形での演奏や音楽活動、後進の指導等を仕事としている。彼らはプログラム内容の立案、当日の司会運営、演奏を担当した。

### 2) 調査方法

A社会福祉法人の職員には法人内で行った3回の活動について、アーティストらには10回行った活動について、それぞれフォーカスグループインタビューを行った。調査時期はアーティストらが2022年1月、A社会福祉法人の職員が2022年2月である。

調査にあたってはインタビューガイドを作成し、A社会福祉法人の職員及びアーティストに共通の設問として、次の4点について回答を依頼した。①全体の感想 ②利用者や家族に関して、何か気付いたこと、感じたことはありますか。可能であれば、内容（エピソード等）も教えてください。③職員に関して、何か気付いたこと、感じたことはありますか。可能であれば、内容（エピソード等）を教えてください。④ご自身にどのような気付きや変化がありましたか。気付いたこと、考えたことなどをお話してください。

### 3) 分析方法

インタビュー内容は同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した後、調査対象者に内容の確認をしてもらった。この逐語録をもとに、質問項目ごとに内容の整理を行った。

### 4) 倫理的配慮

調査対象者には全員、文書で研究目的と研究方法、質問項目について説明し、答えたくない質問には答えなくてもよいこと、協力を拒否しても不利益にならないことを説明した上で、文書による署名の同意を得て実施した。

## 2. 調査結果

はじめにA社会福祉法人の職員への調査、次にアーティストへの調査の順に、質問への回答内容を記す。

1) 職員調査 (表1)

表1 音楽アウトリーチの効果 職員調査

企画の効果 (全体)	「化学反応」が生じた	<p>どう楽しむか、どう化学反応を起こすか、いろいろ掛け算したら何が起きるだろう。</p> <p>振り返れば振り返るほど、効果はこの場だけではなく広がっていることに気づく。ご近所さんたちにつながって、職員が「あの方がこんなに気にしてくれていたよ」と言って帰ってきたことがあった。1アクションが2倍になって返ってくる。そんないい形があるんだったら、今度僕も口下手けどあったら声かけてみようと思う、という職員が出た時点で3倍、4倍になる。ご近所さんが「今日、(施設の職員さんが)来たよ」と帰ってきたお父さんに話す、こう考えると1アクションが何倍になっているか分からない。お声をかけてくださったというアクション、ここから見えない化学反応が起きている、この地域とかこの福祉現場とか。音楽家たちのポテンシャルについても上がっていますよね。</p>
企画の効果 (利用者)	当日の演奏を楽しんだ	<p>体ふりふりして笑っているお子さんや、初めての経験に目を見開いているお子さん。</p> <p>音楽家らの演奏を聴き、その場で踊りを披露してくれた女性がいた。</p> <p>大人の利用者様は演奏会が終わった後も「USA!」と言っていた。</p>
	本物の音楽に触れられた	<p>本物の音楽に触れる機会はそうあるわけではない。</p> <p>(ホールに) せっかく行っても結局、外で遊んでいたりとか、音楽を楽しむところまで辿り着かない状況。</p>
	新しいことに挑戦できた	<p>どんどん入って行って、楽器に触って、スティック奪って、叩いて、このプロセス全てにおいて、彼女の気持ち的なハードルが折られず前に進んで行くことができた。</p>
	自己肯定感が高まった	<p>リズムに乗り、思わず自分でやってみたくなった女の子の積極的すぎる参加を、受け入れてくださったアーティストの皆さんには大変感謝している。あの場面は、まさに自己肯定感が育っていく場であると感じた。</p>
	終わった後の楽しみができた	<p>その日だけでなく、その後もずっと音楽を楽しんでいる。</p> <p>自分が出てくる音楽会の動画視聴を楽しみにしている。</p>
	企画の効果 (家族)	安心して音楽を楽しんだ
楽しい時間を過ごせた	子どもと一緒に手を叩き、企画を楽しんでいた。	
職員や参加者間での交流ができた	参加者との交流を楽しみ、家族同士、または職員と談笑していた。	
心安まる時間となった	毎日見えない不安と戦いながら過ごしていた、医療的ケアの必要な子どものご家族はなおさらのこと、今日のこの時間だけは心休まる時間になったと思う。	
企画の効果 (支援者)	クリエイティブな企画を立案できた	<p>企画について、クリエイティブさを出すのは難しい。それでも、提案があれば、それに応じて楽しい企画を考えていくことができる。</p> <p>皆で非日常の、スペシャルな楽しみの時間を共有できたことが、何よりもうれしかった。</p>
	充実感を得た	<p>最初にこの整理(企画の狙いの整理)を行ったので、私たちもミッションを持ちつつ演奏会を迎えることができ、終わった後にも「近所の方が来てくれて嬉しかったね」などと振り替える機会があって、終わってから皆で一緒に喜ぶこともでき、とても貴重な機会になった。</p>

	<p>困難を皆で乗り越えていく経験ができた</p>	<p>コロナ禍のなか、音楽家を招き、施設で子どもも親御さんも集まるイベントを行えたことが感激、こんなことができるのかと感動した。</p> <p>今回、イレギュラーな時間を得、空気をはじけたような、空気が変わった瞬間を感じた。そして、それは全員で獲得した場だと思った。</p>
	<p>お世話になっている人に感謝を示すことができた</p>	<p>12月の2回目はお世話になっている関係者さん達、訪問看護ステーションの職員や医師に一年間のありがとうの気持ちを込めてご招待する、という企画にした。素晴らしい音楽を日頃の感謝としてお伝えすることができた。</p>
	<p>近隣住民と繋がれた</p>	<p>演奏会に招待した近所の方が「一回行ってみようかな」と初めてここに来てくれた。「こんなところにこんな素敵なお店があったんだね」って来ていただけて。こうやってご近所と繋がれたのは、私たち職員の中でも大きなきっかけになったし、印象に残っていること。</p> <p>事前のつながりなく、いきなりお店に来てというのはご近所さんにとってもハードルが高いと思う。もしご招待なら行ってみようかな、と思えるし、もし気に入ったらもう一度来ていただけるというきっかけづくりもさせていただけたいのはありがたかった。</p>
	<p>地域の施設に対する理解を深めることができた</p>	<p>近隣住民にはご招待券を作って配った。全部の家を回ろう、スタッフだけでなく利用者さんと一緒に、あの建物にいる人です、みたいな。利用者が地域の人と繋がれるようにという気持ちだった。何もないとご近所のピンポンは押せないけど、音楽をやるのでよかったですらどうぞってお誘いだったら訪ねるハードルが下がるし、そこで立ち話とかできたらご近所のことがよく分かるし、私たちにとってはとても大事な情報になる。これをしたことで、地域の変化に気付くことができた。</p>
<p>企画の効果 (自分自身)</p>	<p>自らの疲弊を自覚、癒やされた</p>	<p>コロナ禍において、人が集まることもままならず、混沌とした中、自然豊かな場所で音楽に触れた時、その音楽を楽しむ子どもたちの姿をみて、自然と涙が溢れてきた。その時初めて、自分も疲弊していたことを自覚し、とても癒された。</p> <p>私は1回目にすごく泣けてきちゃって、なんでなんだろうってその時は分からなかったんですけど、でもこういう時間をずっと待っていたんだな、求めていたんだなと思った。</p> <p>長い間先の見えない不安のなかで、常に緊張して毎日を過ごしていて、その緊張がふって溶けた、子どもたちが楽器にふれて、演奏をしてくださって、会場が一つになった時に、私はこうやって皆が集まり、ともにいる時間を楽しむ機会を待っていたんだと気が付いた。</p> <p>少しも油断できない緊張感の中で日々を過ごしていることが当たり前前の毎日になっていて、そのことにも気づかなくなっていたが、音楽を通してその時間だけ心と体が緩んだ時に、毎日見えない不安と戦いながら過ごしていたことに気が付いた。</p> <p>閉じていたものを開いてもいいんだ、楽しんでいいんだと思わせていただいた機会だった。</p> <p>コロナで人が集まるのが減り、リアルなコミュニケーションも減っていく中で、こうして人が集まり、一緒に笑いあえる時間がどれだけ幸せなことかと感じた。</p> <p>自分でも気付いていなかったストレスがあって、でも音楽によって、また雰囲気なのか、皆さんの笑顔なのか、感情が溢れ出てきて、解放された瞬間ですね。これって私たち福祉の仕事をする者にとって大事だと思うんです。</p>

### ①全体の感想

この企画の実施を通じてさまざまな「化学反応」が生じた。企画立案の段階で、どう楽しむか、どう「化学反応」を起こすか、いろいろ掛け算したら何が起きるだろうと考えを巡らせていた。企画が終わり、振り返れば振り返るほど、効果はこの場だけではなく広がっていることに気づいた。職員が『あの方（近隣住民）がこんなに気にしてくれていたよ』と言って帰ってきたことがあった、1アクションが2倍になって返ってくる。自分も声をかけてみようと思う、という職員が出た点で3倍、4倍になる。ご近所の方が自分たちの訪問について帰ってきたお父さんに話す、こう考えると1アクションが何倍になっているか分からない。音楽アウトリーチの声かけをいただいたというアクション、ここから地域やこの福祉現場に見えない化学反応が起きている。アーティスト達のポテンシャルについても上がっているのではないだろうか。

### ②利用者や家族について気付いたこと

#### ・利用者

職員の日から見た利用者への効果として、当日の演奏を楽しんだ、本物の音楽に触れられた、新しいことに挑戦できた、自己肯定感が高まった、終わった後の楽しみができたと感じている。

体を振りながら笑っている子ども、初めての経験に目を見開いている子ども、アーティストらの演奏を聴き、その場で踊りを披露してくれた若者、演奏会が終わった後も「USA!」と言っていた大人の姿を目にした。障害のある子ども達が本物の音楽に触れる機会はそうあるわけではない。以前、地元オーケストラの誘いで演奏会に行ったことがあるが、せっかくの機会なのに、その時は外で遊んでいるなど、音楽を楽しむところまで辿り着かない状況であった。

今回は、2回目の企画において、子どもたちがアーティストの間に入っていき、楽器に触り、スティックを奪って、ドラムを叩くという行動が見られた。このプロセス全てにおいて、子どもの気持ちのハードルが折られることなく、前に進んで行くことができたと感じている。リズムに乗り、思わず自分でやってみたくなった女の子の積極的すぎる参加を受け入れてくださったアーティストの皆さんには大変感謝している。あの場面は、まさに自己肯定感が育っていく場であった。また、当日の企画を録画した家族から「その日だけでなく、その後もずっと音楽を楽しんでいる」「自分が出てくる音楽会の動画視聴を楽しみにしている」という話を聞いて、参加者は企画が終わった後も、録画した動画を見て楽しんでいることが分かった。

#### ・家族

利用者の家族については、安心して音楽を楽しんだ、楽しい時間を過ごせた、職員や参加者間での交流ができた、心が安まる時間となったという印象を持っている。いつも利用している施設という慣れ親しんだ環境で参加することができ、音楽を楽しむハードルが下がった、という声が聞かれた。ご家族は子どもと一緒に手を叩き、企画を楽しんだほか、家族同士、または職員と談笑するなど、その場にいた人たちとの交流も行ってた。今は皆、毎日見えない不安と戦いながら過ごしている。医療的ケアの必要な子どものご家族はなおさらのこと、今日のこの時間だけは心休まる時間になったのではないかと思う。

### ③職員について気付いたこと

職員について言えば、クリエイティブな企画を立案できた、充実感を得た、困難を皆で乗り越えていく経験ができた、お世話になっている人に感謝を示すことができた、近隣住民と繋がれた、地域の施設に対する理解を深めることができたと感じている。企画立案の際にクリエイティブさを出すのは難しいが、今回のようにアーティスト側から具体的な提案があれば、それに応じて楽しい企画を考えていくことができる。コロナ禍のなか、アーティストを招き、施設で子どもも家族も集まるイベントを行えたことが感激で、こんなことができるのかと感動した。皆で非日常の、スペシャルな楽しみの時間を共有できたことが何よりもうれしかった。今回、イレギュラーな時間を得、空気がはじけたような、空気が変わった瞬間であった。そして、それは全員で獲得した場だと思った。

音楽アウトリーチについて、具体的にどのような機会にしていくかを考える際、最初に企画の狙いを整理したのでミッションを持ちつつ演奏会を迎えることができた。終わった後にも「近所の方が来てくれて嬉しかったね」などと振り返る機会があって、皆と一緒に喜ぶこともでき、とても貴重な機会になった。

2回目の企画はお世話になっている関係者、訪問看護ステーションの職員や医師に一年間の感謝の気持ちを込めてご招待する、という企画にした。素晴らしい音楽を日頃の感謝としてお伝えすることができた。

ご近所の方たちには、ご招待券を作って配った。それは、利用者さんが地域の人と繋がれるようにという思いからであった。何もないとご近所を訪ねるのは難しいが、音楽のお誘いであれば声をかけやすい。そこで立ち話とかできたらご近所のことがよく分かるし、職員たちにとってはとても大事な情報になる。実際にご近所訪問をしたことで、地域の変化に気付くことができた。そして、ご招待した近所の方が「一回行ってみようかな」と、初めて施設に来てくれた。事前のつながりなく、いきなり施設に来てというのは近所の方にとってハードルが高いと思う。でもご招待なら行ってみようかな、と思えるし、もし気に入ったらもう一度来ていただけるというきっかけづくりをさせていただけたのはありがたかった。このようにご近所と繋がれたのは、職員の中でも大きなきっかけになったし、印象に残っていることである。

### ④自分自身について気付いたこと

コロナ禍において、人が集まることもままならず、混沌とした中、自然豊かな場所で音楽に触れた時、その音楽を楽しむ子どもたちの姿を見て、自然と涙が溢れてきた。その時初めて、自分も疲弊していたことを自覚し、とても癒された。

1回目に涙が出た時はそれがなぜか分からなかったが、こういう時間をずっと待っていたんだな、求めていたんだなと思った。長い間先の見えない不安のなかにおいて、常に緊張して毎日をごして、その緊張がふって溶けた、子どもたちが楽器にふれて、演奏があって、会場が一つになった時に、こうやって皆で集まり、ともにいる時間を楽しむ機会を待っていたんだと気が付いた。少しも油断できない緊張感の中で日々を過ごすことが当たり前になっていて、そのことに

も気付かなくなっていたが、音楽を通してその時間だけ、心と体が緩んだ時に、毎日見えない不安と戦いながら過ごしていたことに気付いた。閉じていたものを開いてもいいんだ、楽しんでいいんだと思わせていただいた機会だった。

コロナで人が集まるのが減り、リアルなコミュニケーションも減っていく中で、こうして人が集まり、一緒に笑いあえる時間がどれだけ幸せなことかと思った。自分でも気付いていなかったストレスがあって、でも音楽によって、また雰囲気なのか、皆の笑顔なのか、感情が溢れ出てきて、解放された瞬間だった。このような時間は私たち福祉の仕事をする者にとって大事だと思う。

2) アーティスト調査 (表2)

表2 音楽アウトリーチの効果 アーティスト調査

企画の効果 (全体)	演奏を楽しんでもらえた	生の音楽を楽しんでもらえた。 またやってくれ、次はいつ来るんだと声をかけられた。もう1回来てほしいと思ってくれたんだなって感じですね。	
	プラスの方向に気持ちを持って行けた	今は特に閉鎖的になっちゃうけど、何か前向きな、プラスの方向に気持ちを持っていけるようなイベントができたのはよかった。	
	職員とのコミュニケーションが深まった (複数回)	職員さんともいろいろコミュニケーションを取れるようになった。	
	職員と協働できる関係を構築できた (複数回)	職員さんとは信頼関係のような、次はこれやってもらえますかとか、いろいろとってくれるようになりました。一緒に作っている感じが出てきていて、いいと思う。 職員さんに関しては、Aさん、ギター弾く方ですね、コラボしました。それすごく良くて。一緒に演奏して楽しませてみたいな。 職員さんにも、音楽を一緒に演奏することが楽しいことだによって共有できたかな。	
企画の効果 (利用者)	感情を素直に表現できた	驚く程、感情が豊か。個人差はあるとは思いますが、演奏が終わる度に立って拍手してくれたり、演奏中に指揮をやりだしたりと、自分のやりたい事をとでもストレートに表現するのだと思った。	
	全身で喜びを表せた	なんかすごく生き生きとした、元気になってもらった。 職員さんに気を使わせるぐらいグイグイきちゃう。 本当に、どれもすごく盛り上がった、利用者さんは喜びすぎて寝そべっちゃう人もいた。 利用者さんが好きな曲やったら、もう立ち上がって喜んで、みたい。あれすごいよね、ああいう経験は普通じゃない。 スタンドが倒れちゃうぐらい、もう、もみくちゃになって、終わったらみんな汗だくみたいなライブだった。アンコールが続いて、いい加減やめようみたい。	
		ファンになる人を見つけた (複数回)	参加者が (演奏者) 1人1人のキャラクターを覚えて、ファンになっていた。 自分たちを覚えてくださっている利用者さんが何人もいる。 すごい熱心なファン、推しアーティストがいる。
		生活の楽しみができた (複数回)	テンション上がって、待っていてくださっている。

		<p>事前に演奏を告知すると、みんなボルテージ上がっちゃう、前日から知らせると眠れなくなって大変なことになる、そこまで期待度が上がっている。</p> <p>何か生きる支えになってる、そんな感じ。</p>
企画の効果（職員）	企画を楽しんだ	職員さんにも僕らの演奏を楽しんでもらっている。
		職員さんもすごい楽しんでいただいているような感じがしている。
		どんなことをやってくれるんだ、どんな曲やってくれるんだろう、（利用者は）どういう反応するんだろうっていうふうに、職員さんもちょっと、なんかワクワクしてるというか、そういう雰囲気すごい伝わってきました。
		お顔とかですね、表情とか見ているとやっぱり楽しんでいただけたのかなって雰囲気はあったかなと。
	癒しの時間となった	日々忙しい中で、演奏を30分聞けただけでもすごい心がなごんだって言ってくれた。
		職員さんの気晴らしにでも少しでもなれたんだったらよかった。
		アーティストがいることによって、多少明るくなったのかな。多少ストレスがやわらいでいたのかな。職員さんたちの笑顔が少しでも増えているのかな。
企画の効果（自分自身）	聴衆の反応がうれしかった	感情をストレートに感じられるっていうのが、すごい、こっちとしてもうれしい。
		一般のコンサートでは、確かに（参加者が）そこまで激しく感情を見せることはない。
	聴衆の反応がうれしかった（複数回）	演奏をすごい楽しみにしてくれてたっていうのはうれしい。
		次いつ来るんだみたいな、もう1回来てほしいと思ってくれたんだなって感じ。
		もう1回会えたりするとまたね、1回だけっていうより、また違ううれしさがある。
		利用者さんとアーティストが信頼関係というか、認知症の方も多いんですけども、これだけやっていると少しでも覚えてくれてるんだなって、すごい良かったなと思った。
	自らの存在意義を感じた	この活動なかったら結構寂しかったなあと。自分の中でアーティストとして何か存在意義があった年かなって、自分の中で感じたところですね。
		今回の事業はとても大きなことだった。楽譜は全ての曲であるわけではないので自分達用にアレンジをしたり、様々な利用者さん、職員さん達の反応、笑顔を実際に見て、楽器を続けている意義があったように思った。
アーティストとして成長－視野が広がった	福祉の現場でも、今までクラシックの曲、名曲とかを並べてやってみたりしてたけど、それこそなんとなく距離を感じた実践も今までにあったし、質が違うものなのかもしれないけど。皆さんとご一緒させてもらうようになって、歌謡曲とか、みんなが知っている曲を演奏する、それもエンターテイメントというか、楽しげにこう、やるということは僕にとって新鮮。	
	積極的に司会進行するのは得意ではないんですけど。苦手でもやろうと思えるようになったというか、（ソプラノ、バリトンの2人）は特にその場の空気を読むとか、流れを作るとかがやっぱりお上手だなと思うんですけど。クラシックやっているとそれ必要なんですよ。でもそこらへん、少しは柔軟な人間になりたいなと思えるようになりました、特にこういう場所で演奏するときは。こういうチームでやらせてもらえるんだったら頑張れるなというのもある。	

社会福祉領域における音楽アウトリーチの効果に関する探索的研究

		<p>何かその時代に合わせた曲というか、今度行くところはこの年代だから、この年代で流行った曲は何かを調べてみて、曲名が上がったようなものがあれば聞いてって自分たちの研究だったりですね、練習にも関係させてもらえるし。</p> <p>アウトリーチで行政と動く場合、音楽大学と一緒に何かやることになる。ポップスはあるけど、歌謡曲とかエンターテイメントみたいな部分で福祉の方に突っ込もうっていうのは少ない。もっとそういうこともあっていいのにとか、そういうことも思うようになった。新しい自分を発見できた。</p>
アーティストとして成長—スキルが身についた		<p>楽譜制作ソフトを導入し、手書きから卒業。一出勤一曲くらしいのペースでアレンジができるようになった。</p>
アーティストとして成長—企画力が向上した		<p>今までは、何か自分が上手くなりたいとかそういう気持ちでライブやったりしてたんですけど、なんていうのかな、その、人を楽しませるとか、その人のために演奏するみたいなモチベーションとかの気持ちが大きくなった。</p> <p>リクエストに応じて演奏していくうちに曲の中にエクササイズとか、何かまた新しく、プラスアルファで何かもうちょっと楽しませられないかみたいなどころも考えたり、何か小ネタ入れていくことをするようになった。</p> <p>演奏が始まる前、終わった後でも利用者に対して話しかけるようになった。リクエストを聞いたりするようになった。</p>
アーティストとして成長—聴衆に対する理解が深まった		<p>今まで福祉施設等の演奏は1.2回あるが、ここまで利用者に対して考えたことはなかった。</p> <p>一歩踏み込んで、この人たちに向けてやるときにどういう感じにしたら面白くなるのかな、何とかちょっと受けやすいものは何かななど、今までよりも踏み込んで考えられるようになった。</p> <p>高齢者の方だと反応が薄いわけではないんですけど、あんまり出てこないっていうか出せない方もいるじゃないですか。反応が薄いとこっちも探り探りなるというか。でももう、自分たちの感じでグイグイ、それで何か楽しんでもらえている。強い気持ちですっと進んでいく、そのようなことが今までよりもできるようになったのかな。</p> <p>こっちが何か和やかに楽しそうにやっている雰囲気を出せば、多分きっと楽しいだろうなって。普通の方とかだと常識として静かにしなきゃいけないみたいなどころも相まって、なかなか反応が出せなかったり、反応したときにまたこっちも何かをビビりやすいタイプなんで、探り探り、何かもうちょっとはまりそうな話をした方がいいかなとか考えちゃうんですけど、多分そういうわけじゃないんだろうなっていう。</p>
福祉現場への関心が深まった		<p>(障害児の)施設に行ったとき、自分も子どもがいるんで、ああいう状況を見てすごい感じたところはある。いろいろ考えさせられる部分があって、できるだけ子どもと一緒にいてあげたいし、いまあることって当たり前じゃないんだなって気付かされた。幸せって結構目の前にあるんだなっていうことに気づかされた。</p> <p>仲間が介護士の資格を取得したのがとても印象的で、自分も少し興味が出てきている。</p> <p>職員の皆さんは利用者に対して物凄く親身だなと思った。一年の振り返りDVDと一緒に見る機会があったが、コロナ禍の中、いろいろなイベントを企画して一緒に見たり体験してたりしていたことがとても印象に残った。</p>

(複数回)と書いてある記述は、音楽アウトリーチを複数回行うことができた法人に関するものである。

### ①全体の感想

企画全体を通じて、聴衆に自分たちの演奏（生の音楽）を楽しんでもらえたと手ごたえを得た。また、「次はいつ来るんだ」と言ってもらえて、コロナの影響で閉鎖的になりがちな時期にも関わらず、プラスの方向に気持ちを持っていけるイベントができたと感じた。また、複数回活動することができた施設に対しては、職員との間に信頼関係を築くことができ、次回の企画について意見交換ができるようになり、「一緒に作っている感じが出てきていて、いい」という印象を持った。

### ②利用者や家族について気付いたこと

感情を素直に表現している、全身で喜びを表していると感じた。利用者たちは演奏が終わる度に立って拍手をしたり、演奏中に指揮をやりだしたりと、家族や職員が見守るなか、自分のやりたい事をストレートに表現することができていた。なかには喜びすぎてその場で寝そべる人や、好きな曲に立ち上がって喜ぶ人もいて、終わったら皆が汗だくになるほどの盛り上がりを見せた。その場にいた全員で、元気な、生き生きとした時を過ごすことができたと思う。複数回活動することができた施設に対しては、アーティストの訪問が楽しみでテンションが上がる、アーティスト一人ひとりのキャラクターを覚え、自らの推しアーティストを応援するなどの行動が見られた。

### ③職員について気付いたこと

職員については、何をやってくれるのだろうか、利用者はどう反応するのだろうかと期待する雰囲気を感じ取るとともに、利用者と同じく、参加してくれた方々の表情や態度から、一緒に企画を楽しんでもらえていると感じた。また、日々の職務で忙しい状況にはあるが、演奏を30分聞いただけでも心がなごんだと声をかけてもらい、職員の癒し、気分転換やストレス軽減、雰囲気づくりに貢献できたと思う。

### ④自分自身について気付いたこと

聴衆の反応がうれしかった、自らの存在意義を感じた、アーティストとして成長できた、福祉現場への関心が深まったなどの気付きがあった。一般のコンサートでは、聴衆が自由に感情を表現することはほぼない。しかし今回の企画では聴衆のストレートな感情表出があり、それが自分たちの喜びとやりがいにつながっていた。さらに複数回活動することができた施設では、次も来てほしいと声をかけてもらえたこと、利用者や家族、職員と顔なじみになり、彼らが自分たちのことを覚えていてくれたこと、演奏を楽しみにしていてくれたことが嬉しく、信頼関係が構築されたと感じた。コロナ禍で今までのような音楽活動を満足に行えないなか、利用者や職員達の反応、笑顔を目の当たりにし、この活動があってよかった、自らの存在意義を実感し、楽器を続けている意義があったと思った。加えて、今回の活動を通じて視野が広がった、スキルが身についた、企画力が向上した、聴衆に対する理解が深まったなど、アーティストとして成長することができたと思う。具体的には、曲目を考える際、聴き手の年代を意識し、その人たちの時代に合わせた曲や、彼らの年代で流行った曲は何かを調べ、今まで演奏していたのとは異なるジャンル

(歌謡曲)に挑戦する経験ができたこと、その結果、現場の雰囲気に合わせて楽曲のアレンジができるようになったことなどが挙げられる。また、聴衆を楽しませようと取り組むなかで、その場の空気を読み、流れを作ることを意識するとともに今までの音楽アウトリーチの方法に疑問を感じ、福祉現場ではエンターテイメントの視点が求められるのではないかなど、自分たちなりの活動の質向上について考えるようになった。

演奏については、自分が上手になりたいという気持ちに加え、人を楽しませる、その人のために演奏するというモチベーションの高まりがあった。リクエストに応じて演奏していくうちに曲の中にエクササイズを入れたらどうか、プラスアルファで何かもうちょっと楽しませられないかなどと考え、小ネタを入れていくなどの工夫をするようになった。そのほかにも、今まで福祉施設等で演奏を行ったことはあってもここまで利用者に対して考えたことはなかったが、演奏が始まる前や終わった後に利用者に対して話しかけたり、リクエストを聞いたりするようになった。一步踏み込んで、この人たちに向けてやるべきにどう感じるにしたら面白くなるのか、受けやすいものは何かなど、今までよりも踏み込んで考えられるようにもなった。企画運営に関しては、反応が薄い高齢者に対しても、自らが楽しんでいけば楽しんでいただけるとはのではないかなど、聴衆への理解を深め、活動のヒントを得ることができた。

最後に福祉現場への関心について、障害児施設を訪問したことをきっかけに、自らの子どもとの関わりを振り返るなど、福祉の理解を深めることができた。また、介護士の仕事に興味を持ち、職員が利用者に関身に携わる姿を印象深く受け止めるようになった。

### 3. 音楽アウトリーチの効果を感じたエピソード

音楽アウトリーチを通じて、アーティストや職員はそれぞれ、利用者やその家族について何らかの効果があったのではと感じるエピソードを得ていた。ここではインタビューを通じて語られた4つの事例を紹介する。

#### 事例1 生きる希望が見つかった（アーティストより）

ある社会福祉施設を訪れたとき、入口の前でギター弾いている少年がいて、演奏前に自分たちとセッションをしてくれた。終始、和気あいあいとしていて、その時の自分の感想は「愉快的子だなあ」であった。演奏が終わった後に施設の管理者から連絡があり、その少年は人間関係のトラブルなどがあり、最近まで引きこもっていたが、やっと抜け出して、ギターを始めたばかりであったことが分かった。施設の管理者は、自分に「そんなときに今回の活動があって、とても楽しかった、生きる希望が見つかったと言っていた」と教えてくれた。

#### 事例2 明日をがんばる力を得た（アーティストより）

ある施設において、利用者（障害児）の母親が子どもと一緒に企画に参加してくれた。演奏後、その母親はアーティストの一人をインスタグラムで探してフォローし、メッセージを送っ

てくれた。そこには以下のような内容が書かれていた。

“車椅子に座って太鼓を持っていた子の母です。今回も、とても楽しい時間を過ごせました。毎回ジーンときて、泣きそうになるのを必死でこらえて、マイノリティの子どもたちだけ支えてくれる人がいる、音楽で元気を与えてくれる人がいる、今日も元気でいられることに感謝の日々です。私たちに明日をがんばる力をくださってありがとうございました。つらいこともあるけど、また素敵なコンサートをみるのを夢見てがんばります。3度目のコンサートを終えた今、私も、上の娘も、サクソスをやってみたくくなりました。特に私が”

### 事例3 子どもの新たな才能を発見（職員より）

施設を以前、利用していた子どもが今回来てくれて、アーティストの演奏に入っていく、スティックを取り、演奏者の膝にのってドラムを叩いた。しばらくの間、彼女は自由にドラムを楽しんでいたが、演奏の最後には意図的か偶然か、アーティスト達と音をピタッと合わせる事ができた。その姿を見守っていた家族や職員など、参加者は感嘆し、彼女のパフォーマンスを賞賛した。その後、家族はアンパンマンドラムを購入し、彼女は家でも楽器を楽しめるようになった。

### 事例4 ケア方法へのヒントを得た（職員より）

参加した家族が活動の動画を撮っており、それを利用者に見せたところ、不機嫌になっても、ぐずぐずしていても、動画を見ると機嫌がよくなった。それはその日だけでなく、その後もずっと続き、音楽を楽しんでいることが分かった。

その利用者は気管切開していて、お風呂に入るときはバンドが濡れるため交換しなければならない。管が抜けると大事故になってしまうので、ケア側は交換に集中せざるを得ない、しかし利用者としては嫌な時間である。ただし音楽を聴くと落ち着いて交換ができ、自分が出てくる動画を見る楽しみな時間変わった。

どうやら音楽が好きらしいということが分かったので、そこからヒントを得て、その子が出てくるオリジナル動画を作り、手遊び歌とかも入れてみたら、その後、スムーズにバンド交換ができるようになった。今回の企画をきっかけに、家族や職員は利用者の好きなこと、興味のあることに気付くことができた。

## IV. 考察

本研究では、社会福祉現場における音楽アウトリーチについて、企画への協力を得たA社会福祉法人の職員とアーティストのインタビューデータをもとに効果検証を行った。その結果、音楽アウトリーチが利用者だけでなくその家族や施設職員、さらには施設の近隣住民にまで肯定的

な影響をもたらしていることが確認できた。A 社会福祉法人の職員はこの効果を「化学反応」と表現しており、今回の音楽アウトリーチには様々な効果が交錯していること、効果は企画実施時のみならず、その後も続き広がっていくものであることが確認された。本研究は探索的な内容ではあるが、社会福祉現場における音楽アウトリーチに関する実践の蓄積が十分に行われていない現在、本研究で見出された効果は今後、この領域で研究を行ううえでの基礎的な知見として位置づけられると考える。

ここからは利用者、家族や施設職員、アーティストの順に、今回の調査で確認できた効果について順に考察していく。

### 1. 利用者に対する効果

病棟における音楽療法または音楽の利用に関する効果について研究した松本（2020, 2021）は、患者への効果として、意欲や活動性の向上のほか、表情が豊かになったり、他者との交流が増えたりすることを挙げている。今回、社会福祉の領域（障害児者支援）で行った音楽アウトリーチでは、参加者はアーティストらが驚くほど素直な感情を表出し、喜びを前面に出していた。ジャンルにもよるが、地域で行われる音楽イベントにおいて、障害児者が声を上げたり感情のままに振る舞ったりすると、周囲の人々から冷たい視線を浴びたり、大人しくするよう言われることもあり、気兼ねなく楽しめるとは限らない。コロナにより自粛生活が叫ばれ、自己表現ができる機会そのものが激減するなか、このように仲間や家族と一緒に楽しまれる機会は貴重であり、利用者たちにとって非日常の喜びやストレス発散という点で大きな意味があったことがうかがえる。また、事例で示したように、この効果は活動が終わった後も、撮影された動画を視聴することにより継続していた。その他、事例1や事例3のように、特に意図したわけではないがアーティストとの出会いが利用者の生きる力を引き出すきっかけとなっていたことも確認できた。

参加者が高齢の場合、アーティストらは最初、障害児者と比べ、「反応が薄い」と感じていた。しかし参加した者は手を叩く、一緒に歌うなど、その人なりのやり方で楽しんでおり、アーティストらは「高齢者に対しても、自らが楽しんでいけば楽しんでいただけるのではないか」と考え、内容の工夫に努めていた。森川（2019: 441）は「わが国では、とくに認知症を有する高齢者の世代において、文部省唱歌の普及により、地域や生活環境に左右されることがほとんどなく共通に知られている曲が種類と数において豊富である。これは音楽療法にとって諸外国に例をみないきわめて有利な環境である・・・認知症を有する高齢者を対象にした場合はとくに、セッション構成の中心に『なじみの曲』や『好みの曲』を使用した活動を取り入れることが重要である」と述べている。今回の実践においてアーティストらはどうしたら参加者に楽しんでもらえるかと考え、彼らの年代で流行った曲を調べて演奏するなど、対象者の好みの曲や思い出の曲、なじみの曲を選ぶことにより、活動への手応えを得ていた。

今回の実践により、単発の演奏でも利用者に喜んでもらえることが確認できたが、同じ施設に

何度も訪問することにより、さらなる効果が期待できることが分かった。この先、訪問の予定があれば、利用者たちは次の活動を楽しみに待つことができる。また、自分のお気に入りのアーティストを応援し、再会を夢見るといった楽しみ方もできる。今回、活動を行った高齢者施設では、演奏の予定を告知すると興奮して眠れなくなる利用者もいるため、具体的な日程は示さず、当日に告知するという工夫をしていた。利用者の体調には十分配慮する必要があるが、この先に楽しみな予定がある、という状況は日々の生活を豊かにするものであり、QOL向上の点から大きな意義があると考えられる。

## 2. 利用者の家族に対する効果

音楽アウトリーチは、利用者のみならず、その家族や施設職員に対しても喜びや癒やし、気晴らしなどの効果を期待できることが明らかになった。コロナ禍の今、要介護者を抱える家族は通常以上に気を張り詰めて介護にあたっており、彼らの疲弊は深刻である（宮本 2020, 中島・松井 2022）。そのようななか、アーティストらによる音楽は、彼らにとっても癒やしであり、有意義なものとして受け止められていた。

事例3にあるように、アーティストらの来訪が、利用者の家族に「マイノリティの子どもたちだけで支えてくれる人がいる、音楽で元気を与えてくれる人がいる」との思いを抱かせ、そして「明日をがんばる力」につながっていた。障害のある子どもの親は、子どもの世話に追われ、子どもを最優先するあまり、自分自身のやりたいことを二の次にしている場合が少なくない。そんななか、この音楽アウトリーチをきっかけに、一人の母親が自分自身に沸き起こる思いを大切に、自分も楽器演奏に挑戦してみたいという希望を抱き、アーティストに伝えることができた。これは家族の生きる力を引き出したという点からも、特筆すべき効果といえるだろう。

## 3. 社会福祉施設の職員に対する効果

社会福祉の現場で働く彼らはエッセンシャルワーカーと呼ばれ、社会の維持向上に必要不可欠な職種であるとされている。とはいえ体力面で負荷がかかる仕事でもあり、業界としての人手不足状況はコロナ禍でより拍車がかかっている。ただ今回の調査から、音楽アウトリーチが施設職員に対しても癒やしやストレス緩和等の効果をもたらしたことが確認できた。音楽アウトリーチは社会福祉施設で働く職員の労働環境の向上という点からも有益と言える。

それに加え、職員が利用者の新たな一面を発見できたという点についても注目していきたい。教育現場における音楽アウトリーチにおいて、林（2003: 109）は、「常日頃から生徒の姿を細かく観察している教師だが、音楽のアウトリーチ活動では『演奏家』という第三者が生徒に働きかけるという点で非日常的な要素が生まれる。そして『演奏家』と『子ども』の交流を客観的に観察することも、生徒に関する新たな気づきに繋がる」と述べている。医療現場においても、松本（2021）は職員への効果として、患者の様子の変化や患者の新たな面に気付くといった点があることを指摘している。これらの知見と同様に、社会福祉現場においても、職員は事例4に見られ

るよう、利用者に関する新たな気づきを得ていた。このように、職員の利用者に対する理解が深まり、新たなケアのあり方へのヒントを得られる点については、音楽アウトリーチの重要な効果の一つとして、社会福祉の現場に伝えていきたい。

その他、職員は演奏会へのご招待という形で近隣住民との関係構築も行っていった。社会福祉施設の職員は、近隣住民に対し、施設の事業や活動を理解し、利用者を温かく見守る存在になっていただけたらと望んでいるが、実際に働きかけを行うことは難しい。今回の音楽アウトリーチは、そのような働きかけに向けたきっかけ作りとしての効果もあることが確認できた。

なお、複数回、活動を実施できた施設では、職員とアーティストが協働して企画に携わるなど、よりよい関係を築くことができていた。このような形で企画立案ができれば、その施設により適した活動を提案することができ、参加者の満足度は高まるであろう。また、利用者や家族、職員の参加型の企画を提案することも可能になる。このように、職員とアーティストが連携して企画を創りあげていくことができたなら、職員のやりがいや自己肯定感の向上という側面からも、さらなる効果が期待できるだろう。

#### 4. アーティストに対する効果

本事業に参加したアーティストらは、目の前で聴き手が喜び、楽しんでいるのを見て自分自身の存在や演奏活動そのものに意義を感じることができた。アーティストらは思いがけない反応を示す聴き手に戸惑うこともあったようだが、柔軟に対応し、企画の内容を変更させるという工夫を行っていた。聴き手に関心を寄せ、彼らの好みに合わせた演奏や運営をめざし、人間関係を築き、どうしたら楽しんでもらえるかと試行錯誤した結果、アーティストらの視野は大きく広がり、音楽家としての成長へとつながっていた。障害や高齢など、様々な特性を持つ人々を対象に行った企画の運営ノウハウは、この先、彼らが演奏活動を行ううえで大いに役に立つと思われる。

アーティストにとってのアウトリーチの意味を探求した梶田・中村ら（2021: 144）はアウトリーチを経験し、アーティストとしての独自性や生き方に対する意識の変化がもたらされる、音楽への向き合い方、相手に寄り添うことを思考する演奏法等を習得したことによってオリジナリティを獲得する、演奏による社会貢献を実感したことによって社会の中でのアーティストとしての社会的価値を見出すなどの効果を示しているが、本研究の調査を通じて、同様な効果が生じたことが確認できた。

また、アーティストらは今回の活動をきっかけに、福祉現場や利用者の理解を深めていた。彼らはもともと福祉についてそこまで詳しい知識を有していたわけではない。しかし今回、様々な福祉の現場を訪れ、利用者の生活を垣間見たことで、彼らは社会福祉施設や事業所のサービスに関心を抱くようになった。なかには利用者の幸せに思いを馳せ、福祉に関心を持つ者も現れた。これらの変化からは、音楽アウトリーチという活動は、福祉教育という視点からも効果的であることが示唆される。梶田・中村（2021: 143）は音楽アウトリーチによって、アーティストがこ

れまであまり向けられてこなかった社会全体に意識が向けられるようになることを指摘しているが、今後、社会福祉の現場に触れ、アーティストらの意識が実際にどのように変わっていったのかを示すことは意義のあることと考える。

その他、アーティストからも、同じ施設を繰り返し訪問することの利点が語られた。社会福祉の現場において、音楽アウトリーチを継続的に行われる活動にしていくためには、原ら（2016）が指摘するように、現場でどのような効果があるのか、またどのような効果があるのかを明らかにすることが不可欠である。この蓄積が活動を単発ではなく、継続的な活動へと発展させていくことにつながるため、同じ施設にて複数回実施する効果について調べていくことは今後、この領域における重要な研究課題の一つであろう。

## V. おわりに

本事業の実施にあたり、筆者が最も気にしていたのは、この音楽アウトリーチが社会福祉施設や事業所の利用者にどのような変化を及ぼすか、家族や職員はどのように受け止めるのかであった。感染防止対策を十分に行った上での実施とはいえ、リスクをゼロにすることはできない。その状況において、社会福祉の領域であえて活動を行う意義はあるのか、参加者によい効果を及ぼすことができるのかについては葛藤の日々であった。

この点について、今回、調査協力を得た A 社会福祉法人の職員からは「正しく恐れる」という方針が伝えられた。それは、コロナを言い訳にして、子ども達の経験を奪ってしまっていることが山ほどあるのではないか、コロナを言い訳にせず、機会を得たから行うのではなくて、子どもたちに必要な経験については、正しくコロナを恐れつつ、責任をもって行うことが必要ではないかという問題提起である。

社会福祉施設や事業所は、利用者たちの生活の場である。感染を恐れるあまり、周囲の支援者が利用者に必要な経験を奪ってしまっていないだろうか。もしそうなっていても、特に苦情が寄せられることはないかもしれない。でも、それでよいのか。利用者に必要な経験についてはコロナを恐れつつも十分な対策を講じ、責任をもって行う、そう語る A 社会福祉法人の職員からは、法人がめざす「必要な時に、必要な人に、必要なサービスを。」が揺るぎなく貫かれていることを実感した。

ただし職員の労働という点から言えば、音楽アウトリーチを実施するにあたり、関係者のスケジュールを調整する、受け入れ体制を整える、近隣住民に知らせるなど、通常では生じない業務が発生し、ただでさえ忙しい業務に何らかのしわ寄せが生じていたかもしれない。今後、社会福祉施設の職員が無理なく、納得して企画に臨めるようにするための体制を整備していく必要がある。

この先コロナが収束したとしても、新たな感染症や地域災害などが生じ、思い描くような社会福祉実践を行えなくなる時が来るかもしれない。その時には今回の音楽アウトリーチの経験をふ

まえ、社会福祉の現場は何を求めているのかを考え、自分たちに何ができるのかを問いかけていきたい。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた A 社会福祉法人の職員 2 名、アーティスト 5 名の皆様に感謝申し上げます。皆様の献身的なご尽力のおかげで、意義深い音楽アウトリーチを行うことができました。また、公益財団法人ヤマト福祉財団から 2021 年度障がい者福祉助成金、株式会社ユピアからはオーブの枝助成金をいただき、企画に必要な費用を捻出することができました。この事業の意義をご理解いただいたこと、助成くださったことに心からお礼を申し上げます。

## 注

注 1 林 (2013) によれば、海外ではアウトリーチという概念そのものが提供者から享受者への一方的な関係を想起させるため、アウトリーチという語だけが使われている訳ではなく、「エデュケーション・プログラム」「パートナーシップ・プログラム」「コミュニティ・プログラム」といった語を用いる傾向も強まっているという。

注 2 音楽療法について、本稿では辻、岩佐、中川らが示す「音楽のもつ生理的・心理的・社会的働きを用いて、心身の障害の軽減回復、機能の維持改善、生活の質の向上、問題となる行動の変容などに向けて音楽を意図的・計画的に使用すること (2021: 209)」という定義を用いる。

## 引用・参考文献

- 赤澤澤造, 奥野竜平, 一ノ瀬智子, 竹原直美 (2019) 「楽器演奏・音楽療法の認知症予防効果に関する文献レビュー第 2 報」生体医工学 Annual57 (Abstract), S119\_1-S119\_1
- 文化庁「文化芸術による子供育成推進事業」<https://www.kodomogeijutsu.go.jp/> 2022.5.4 閲覧
- 林睦 (2003) 『音楽のアウトリーチ活動に関する研究—音楽家と学校の連携を中心に—』(大阪大学博士論文)
- 林睦 (2013) 「音楽教育におけるアウトリーチを考える——基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向——」音楽教育実践ジャーナル 10 (2), 6-13
- 原尚志, 山中和佳子, 木村次宏 (2016) 「音楽アウトリーチ活動の実際と展望 —福岡県宗像地区での実践を通して—」福岡教育大学紀要. 第六分冊, 教育実践研究編 (65), 1-8
- 梶田美香, 中村由加里 (2021) 「音楽芸術分野のアーティストにとっての公立文化施設によるアウトリーチ活動の意味 —インタビューの分析による検討—」名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究 36, 135-147
- 松本淳子 (2020) 「病棟における音楽療法の実践と効果に関する予備調査」日本教育心理学会総会発表論文集 62 (0), 281
- 松本淳子 (2021) 「病棟における音楽療法または音楽の利用に関する効果」日本教育心理学会総会発表論文集 63 (0), 376
- Celia Moreno-Morales, Raul Calero, Pedro Moreno-Morales, Cristina Pintado (2020) Music therapy in the treatment of dementia: A systematic review and meta-analysis. *frontiers in Medicine* 19 May 2020 | <https://doi.org/10.3389/fmed.2020.00160>
- 森川泉 (2019) 「認知症高齢者への音楽療法 (特集 認知症の非薬物療法のエビデンスと効果的な実践のあり方)」日本認知症ケア学会誌 18 (2), 438-443
- 宮本恭子 (2020) 「新型コロナウイルス感染拡大と家族介護者に関する研究」島根大学法文学部山陰研究

- センター 山陰研究 13,97-113
- 新原将義, 大澤愛, 茂呂雄二 (2015)「幼稚園・保育園での音楽アウトリーチに関する保育者の語りの質的検討：一修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて一」音楽教育学 45 (1), 1-12
- 中島園美, 松井左知子 (2022)「新型コロナウイルス感染症による活動自粛が認知症の家族介護者に与える精神的影響に関する質的研究」日本在宅医療連合学会誌 3 suppl.-1, 40-44
- 永島茜 (2021)「音楽アウトリーチ研究の現在：活動が抱える課題の分析と今後の方策（田中每実教授 退職記念号）」学校教育センター紀要 (6), 95-108
- 小笠原牧, 佐々木伸晃, 加藤拓彦ほか (2020)「介護老人保健施設入所認知症高齢者の余暇活動と認知機能, ADL能力, 生活意欲およびBPSDとの関係」認知症ケア学会誌 19 (3) 548-556
- 小野隆洋, 上村有平 (2021)「学校長からみた音楽アウトリーチの効果：学校内外の連携にも着目して」山口芸術短期大学研究紀要 53, 29-47
- 関根薫, 八重田淳, 佐島毅 (2021)「高齢者への音楽を用いた二重課題による介護予防効果の検討」日本音楽療法学会誌 21 (1), 46-58
- 齊藤豊 (2013)「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開 —アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み—」音楽教育実践ジャーナル 10 (2), 71-79
- 辻麻由美, 岩佐京香, 中川柚子, 横尾誠一, 浜崎美和, 吉田浩二 (2021)「認知症高齢者に行う音楽療法の効果：客観的指標に着目した文献的検討」ホスピスケアと在宅ケア 29 (3), 203-211
- 上村有平, 小野隆洋 (2022)「音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果：感想文の分析から」山口芸術短期大学研究紀要 53, 15-27
- 吾妻真衣, 林睦 (2021)「音楽アウトリーチのコラボレーションに関する一考察 —特別支援学校での実践をもとに—」滋賀大学教育学部紀要 (70), 99-109
- 山口未久, 鈴木真知子 (2019)「重度障害児のコミュニケーション支援に効果的な介入に関するシステムティックレビュー」日本小児看護学会誌 28 (0), 318-324
- 山田敏恵 (2020)「精神障がいを持つ人を対象とする音楽活動の展開過程 —専門職による実践を手がかりに—」社会福祉学 61 (2) 31-44